

岡山・吉野口よしのぐち（鯉山小）りざんしょう 遺跡

- 1 所在地 岡山市吉備津
- 2 調査期間 一九九一年（平3）八月～一九九二年一月
- 3 発掘機関 岡山市教育委員会
- 4 調査担当者 草原孝典・河田健司
- 5 遺跡の種類 寺院跡・集落跡ほか
- 6 遺跡の時代 縄文時代晩期～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



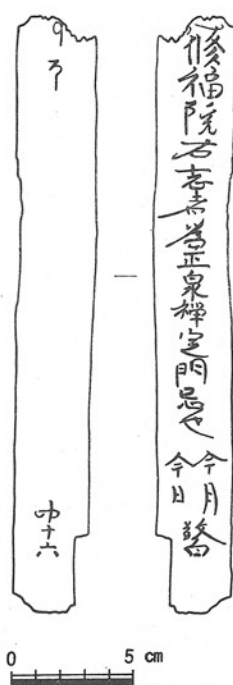
（岡山北部・岡山南部）

吉野口（鯉山小）遺跡は、岡山市街地の西方約6km、吉備高原から南流する足守川の形成した沖積平野の東岸中央やや南寄りに位置している。周囲には大小の古墳や集落遺跡、古代寺院等が密集しており、このあたりが、吉備と称されていた地域の中心地の一つであったことが推定されている。当遺跡地は『平家物語』の登場人物で、木曾義仲に討たれた平家方の武将妹尾

（瀬尾）太郎兼康の菩提寺として建立されたと伝えられている道勝寺の跡地で、寺の廃絶した明治以降は小学校の敷地になっている。今回の発掘調査は、鯉山小学校給食棟新築に伴うもので、面積は約800㎡である。

調査の結果、近世の寺院跡（上・下層二面）、鎌倉時代、奈良～平安時代、古墳時代、弥生時代中期～後期、縄文時代晩期の七面もの遺構面が確認され、それぞれに多くの遺構が検出された。遺物の出土量も多く、整理用コンテナに約200箱出土している。

今回報告する木簡は、近世下層面で検出した寺域を囲む堀であったと推定している幅3mほどの溝の底付近から出土した。溝からは他に、漆塗りの木箱片や、陶磁器、瓦、凝灰岩（豊島石）製の一石五輪塔が出土した。溝の縁辺には、積み石をし、七〇～八〇枚の渡来銭を副葬した座棺の墓が三基並んで築かれており、溝から出土した一石五輪塔や木簡も内容的にみて、本来はこれらの墓の上に立てら



れていたものと思われる。近世下層面の時期は、陶磁器の年代観や「慶長十四年」銘の陰刻のある鬼瓦が出土していることから、一六世紀末～一七世紀と考えている。

8 木簡の帛文・内容

- (1) 「修福院右志者為正泉禪定門忌也」今日敬白

●
□^{〔力〕}
力

中十六

260×30×10 081

明確な日付けが書かれていないものの、内容は板碑などに刻まれている銘文と類似しており、追善供養をしたことを示している。ただ供養の具体的な内容が五輪塔の造立なのか、何らかの法要を営んだことなのかは明確ではない。

以上が調査時での知見で、今後出土遺物を整理していく過程で道勝寺との具体的な関係なども検討していきたい。

（草原孝典）

長登銅山跡（山口県美祢郡美東町）

出土の逃亡関係木簡

長登銅山跡は本誌第一三号で報告したように、奈良時代以来の銅製鍊跡で、銅山経営に関わる木簡も多数出土している。左に紹介するのは、一九九〇年度調査で発見されたものであるが、木簡研究一三号には未報告である。釈文は次のとおり。

「逃」
十二 十一
十二 四 一
四 六 一
六 十 二
十二
四十八 冊
人

「大友三百五十五斤」

(228) $\times 52 \times 4$ 019

表の「逃」は逃亡者の意で、以下、人数が記される。銅山の下級官人が、一定期間の逃亡者を文書に清書する前のメモではなにかといわれ、当時の計算方法が知られる点でも貴重である。つまり「十二」と「四十八」だけが丸で囲まれ、その他の数字の右わきには「一」「二」の符号が残っているので、計算方法は、四回出てくる「十二」をまずかけ算で四倍して「四十八」を算出し、残りは数字を足し算で「卅」を出したと考えられ、計八十八人の逃亡者がいたと見ることができるという。

長登銅山跡出土の木簡は、生産機構の解明が可能な点で、今後の研究の進展が大いに期待されるところである。